新編 江戸幻想文学誌

高田 衛
Takada Mamoru

ちくま学芸文庫

ちくま学芸文庫

新編　江戸幻想文学誌

二〇〇八年六月七日　第一刷発行

著　者　高田　衛（たかだ・まもる）

発行者　菊池明郎

発行所　株式会社　筑摩書房

東京都台東区蔵前二-五-三　〒一一一-八七五五

振替〇〇一六〇-八-四一二三

〇四八-六五一-〇〇五三（サービスセンター）

装丁者　安野光雅

印刷所　株式会社精興社

製本所　株式会社鈴木製本所

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

© TAKADA MAMORU 2008　Printed in Japan

ISBN4-480-08552-1 C0195

ちくま学芸文庫

新編 江戸幻想文学誌

高田 衛

筑摩書房

目次

怪談の発生――江戸期作者の側から……9
三月十八日の夢　闇の語り手たち　闇・夢・そして怪異文学の成立
禁忌と犯し――怪談の生成

＊

幻語の構造――雨と月への私注……25
宗貞の韜晦　二重な心性の中のことば
「わやく」の両義性と『雨月物語』の言語　幻語――その表層と深層
「恨みの秋」　連鎖の物語・水の秩序　キイワードとしての「雨」と「月」
雨月の夜の光と影　幻語の方法

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

物語の再生と夢語り——秋成・庭鐘・綾足たちの世界……51
夢みる老人　庭鐘の「紀の関守」の物語　夢託の思想
「愛」という主題の出現　夢語りの構図　夢現象とその表現
宣長の「夢」理解　綾足の「よみの巻」　深草という空間
境界——夢語りの必然性として　冥婚の幻想　綾足、この夢想家の論理
喜多村金吾の恋
狂蕩の夢——上田秋成……137
余斎乞食　三余斎から天罰七十余斎へ　故郷喪失の論理
「狂蕩」——聖と俗のはざまにて
*
亡命、そして蜂起へ向かう物語——『本朝水滸伝』を読む(I)……153
東宮出奔　反勧懲小説としての『本朝水滸伝』　古代中央政権と亡命者たち
連帯する異族王たち　大納言姫君の密通　過激なる虚構
山中他界の神々の蜂起
遊行、そしてまつろわぬ人々の物語——『本朝水滸伝』を読む(II)……187
作者と国家——綾足の父について　異説の中の津軽校尉　鼻彦軍談

闇の物語としての「正史」〈倭建命〉モチーフの問題　浮び上る遊行の伝統

＊

怪異の江戸文学――世の中は地獄の上の花見かな（一茶）……211
江戸文学と「悪」「地獄」と「花見」　一茶の〈人鬼〉認識
京伝の「美少年」と「女侠」『桜姫全伝曙草紙』の世界
松平定信の「怪異」事件　怨念の構図とその現実的根拠　アニミズムの復権
京伝の骸骨モチーフ　化政期江戸文学の原質をめぐって

稗史と美少年――馬琴の童子神信仰……249
『近世説美少年録』のこと　馬琴の「美童」論
美少年――終末論的世界として　『封神演義』と『八犬伝』

近世最悪の怪奇物語――般若の里の鬼女譚……271

あとがき　295
文庫版あとがき　299
解説〈大江戸マニエリスム事はじめ〉　高山宏　301
初出一覧　308

新編 江戸幻想文学誌

怪談の発生——江戸期作者の側から

三月十八日の夢

寛政十一年（一七九九）己未春三月十七日、馬琴は冥土へ行った夢を見た。いま流にいえば三月十八日あけがたのことである。ふしぎにその夢は目がさめてからもはっきり覚えていた。筆まめな彼はそれを克明にノートした。「夢に冥土」という題で、それが『烹雑の記』に載っている。「痴人、面前に夢を不レ説。われ又秘して、何にかはせん」と付言をつけて……。

物思へばながむる空も霞こめて、世は春ながらこもりゐつ。詞かたきもがなと思ふ

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

折、亡友某甲、忽然と来にけり。予、あやしみて、子は曩に身まかり給ひぬと聞たるに、今訪るゝことこゝろ得がたし。いかなる故やあると問ば、友のいはく、その事に侍り。けふなん冥府放赦の日なれば、吾們たま〳〵遊行を許さる。いざ給へ、黄泉の光景を見せまゐらせんといふ。予、遽しゝこれと共にゆく程に、前程いくそばくそをしらず。又絶て東西を知らず。遂に忽地、友に後れて、ます〳〵こゝち惑ひにけり。山を踰、水を渉り、ゆき〳〵て見かへれば道次に官舎あり。門前に莚布わたしたる上座に、媼ひとりみつわぐみてをり。ちかくなる随にこれを見れば、荆婦が養母会田氏なり。（中略）海月の骨にあふこゝちして、別離の情を述るほどに、（中略）また外姑に対て、わが親胞兄弟は何処にをはする。あはし給ひてんやといへば、外姑、答て、この事、容易からずといへども、あはんと思はゞゆきてたづねよ。路なほ遥なりとて、叮嚀に指南せられしかば、やがて外姑に辞しわかれ、ひたと走ること、数十町にして、路いと陜く、忽地に暗くなりて、日のくれたるごとし。時に前面に物ありて、ゆるし玉へ、ゆるし給へと叫びしかば、胸まづうち騒ぎながら、その声を嚮導にしてゆきて、これを見れば、身長六尺あまりなるいとおどろ〳〵しき盲法師が、嚮に予を誘引来れる亡友をうつ俯に踏すえ、汝何の為に陽人を伴ひ来れる。今もしこれを忽にせば、必地府の制度を乱さん。とくいへ。いはずやと罵つゝ打懲すにぞありける。（中略）忽

地、袂を引ものありけり。驚つゝ見かへれば、外姑なり。声をひくめて、よからず〳〵汝速に帰るべし。もし帰らずば、彼友ます〳〵答をうけん。人を苦むるは善根にあらず。とく〳〵といそがしたり。われいまだ、親胞兄弟に環会奉らず。こゝよりむなしく帰らんは、遺憾きこといふべうもあらねど、何ともすべなくて、又外姑に導かれ、旧来し路へかへると思へば夢さめにき。……

目がさめてみると、寝衣をとおすほどにびっしょりと汗をかいていたと馬琴は書いている。

そこに、俗説に説かれるようなおどろおどろしい地獄図があったわけではない。亡友を打擲するのは荒唐なる牛鬼・馬鬼どもではなく、「六尺あまりなる」盲法師であった。外姑は、とある屋敷の門前に莚をしいて糸くりをしていた。非日常というにはあまりに日常的な、そのくせ唐突な冥府の夢の光景ではあった。そして、それゆえにかえって、馬琴は、この夢にまがう方なき「冥府」を実感したようである。馬琴はこう書いている。「むかし、小野篁の生ながら冥府にゆきかひ給ひたる、笙窟の日蔵の燋熱地獄を見給ひたる。その事、妄誕に近しといへども、夢としいはゞ誣べからず。けふよりしてわれは信ず。白氏が三夢記、寓言にあらず。于時、己未ノ暮春十九日、家廟を拝して自記し訖」。時に馬琴、

三十三歳。その名も夢を暗示する『月氷奇縁』[1]を書き下して、一流作家の地位を確立する日の、ちょうど五年前のことである。

住むところこそちがえ、この年六十六歳で京都に居た上田秋成が、歳も暮れがたになって、同じく死せる妻瑚璉尼（ぐんに）の、黄泉からの手紙に接した夢をみた（「よもつ文」）のはおもしろい偶然である。同じ年にみた、それぞれの冥土の夢を比較すれば、二人の作家的資質のちがいは歴然たるものがあって興味ぶかいが、いまは触れないことにする。

闇の語り手たち

それよりも、たとえばこんな問題が考えられる。馬琴に答えて、亡友は「冥府放赦の日」といった。お盆ならいざ知らず、三月十八日に地獄の釜の蓋があくなどとは聞いたことがない。しかし、誰もがただの日付と思うだろうこの日を、柳田国男翁ならば、けっして偶然に帰することはしなかったにちがいない。

「三月十八日は決して普通の日の一日ではなかった。例へば江戸に於いては推古女帝の三十六年に、三人の兄弟が宮戸川の沖から、一寸八分の観世音を網曳いた日であった。だからまた三社様の祭の日であった。といふよりも全国を通じて、これが観音の御縁日であった[2]」。しかも、それだけではない。「三月十八日は簡単に観世音の御縁日と、片付けてし

晩年の曲亭馬琴　この時、両眼とも盲いていた。歌川国貞画、木村黙老『戯作者考補遺』より。

まふわけにも行かぬやうである。例へば伝説上の小野小町、和泉式部、さては歌の神と祀らるる人丸大明神なども、すべて此日を以て命日として居り、言はば我々の昔語りの日であつた」[3]。この文脈では「昔語り」とは、先祖に近づく話のことに他ならぬ。柳田氏はまだ幾つかをあげ、そして述べている。「暦で口を算へて十八日と定めたのは仏教としても、何かそれ以前に暮春の満月の後三日を、精霊の季節とする慣行はなかつたのであらうか」[4]。

馬琴は特別な観音の信者ではなかったし、「精霊の季節」について右のような知識があったとも思われない。しかるに三月十八日の夢は、この日を「冥府放赦の日」とし、奇怪にも過去形でもって、近代の柳田説を裏づけてしまうのである。わたしはこれを、できればただの偶然とみたい。けれど、生涯にただ一度の馬琴の（夢の）冥府訪問が、盆の精霊会でもなく、ましてただの日でもなく、当時なかば忘却の中にあった、さまよえる精霊たちの復活の日、そして闇の語り手たちの目ざめる日、三月十八日以外のどの日でもなかったという事実は強烈にすぎる。そして馬琴の冥府訪問の第一の目的が、口碑、昔語りの語り手としての先祖の歴訪にあったことと[5]、それはあまりにもみごとに符合する。

ちなみにいえば、翌十九日が馬琴の祖父興吉（おきえ）の命日であった。先祖（血筋）の物語への希求とは、いわば過去という時間の中にかくされた、未知なる物語世界への憧憬であろう。夢がその道をつくるのだが、その闇の中から、小町、和泉式部、人丸大明神らに象徴され

る晦冥幻暈の伝説世界という、彼のもう一つの血筋が脈搏ちはじめる――たとえば、六尺豊かな盲目の法師である。琵琶法師にかぎらず、彼らこそが、畏ろしくも聖なる「昔語り」の語り手たちであったことは周知であろう[6]――ことを、いったいどう考えればいいのだろう。

「けふよりしてわれは信ず」という一語は、目ざめて後の、したたかに寝衣を濡らした冷たい汗を代償にして得られた一語である。何を信じたのか。いうまでもなく「闇」をである。そして「夢」をである。けっして馬琴は夢と現実を錯雑したのではない。なまじの現実よりも、夢であることによっていっそう生き生きした、もう一つの物語世界があることを信じたのである。そして、日蔵上人を、小野篁を、『三夢記』等の異国の幻想を信じたとき、馬琴は、冥土他界を夢にみた人たち、日蔵、篁、菅原孝標女、慈心房尊恵、近世でいえば京都鷹が峰の米穀商溝口清助、後人でいえば異邦人小泉八雲らの系列の一人、語り手、すなわち幻想の祖述者となったのである。わたしは、いま、にわかに馬琴巫覡説をたてようというのではない。いいたいのは、上田秋成が加島稲荷の六十八寿神授説を信奉し、本居宣長が吉野水分神社の申し子たることを確信したように、前近代人滝沢解には、内なる豊饒としての「闇」があったということである。三月十八日の夢は、その「闇」のありかを示したのであった。それこそ近代の作家が見失っていったものであった。それを囲繞

试读结束：需要全本请在线购买： www.er